

川村鈴次先生と私

水野裕正

この種のものは本来ならば川村先生の直弟子がその功を称えて書くのが本道であると思うのであるが、偶々、急に御病気で先生が倒れたために、10余年にわたって、先生の研究室に同室させていただいたという理由で、不肖私が、先生の80歳の誕生日を祝して、先生の生活のほんの一部を紹介させていただきたいと思う。私は先生とは専攻分野も異なり、また弟子でもありませんので、先生の御研究については何も述べることはできませんが、先生との出会い、研究室での先生の振舞い等を通して少々書かせていただきたいと思います。

私が始めて川村先生にお会いしたのは名古屋市緑区の区役所の法律相談の会場でした。先生は1人の瘦せた見るからに苦勞と共存しているといった様子の婦人を前に、熱心に難問の解決策を探し求めておられる様子であった。やがて、相談室の隅に座っている私を見つけられた先生は、「やあ、すみませんね。もう一人で今日の相談は終わりますから」とニコニコしたお顔で話しかけられ、すぐ又、もとの厳しい顔で、相談に応じられていた。

私が当区役所に川村先生を尋ねた理由は、「川村先生も名古屋商科大学から創価大学に移られる」というお話しを高松学長からお聞きしたからである。当時、私は大学教員の仕事は自分には適していないのでは、また、創価大学が掲げる理想が私の能力を遙かに超えていること等から、八王子に移ることについてなかなか心が定まりませんでした。そこで、私の勤務校（中京大学）の近くで教鞭を取っておられた大先輩の川村先生にその御心境をお聞きし、私の進退をはっきりさせたかったからである。

法律相談を終えられた川村先生から「やあ、お待ちどうさま」と声をかけられ、役所のほど近くにある私宅に先生を案内したのは6時頃であったと思う。先生がお酒好きであることもこの時知った。タバコも大好きである。杯を重ねながら世相を語る先生の熱弁は、無能、無気力な私を勇気づけてくれた。此の世に生を受けたからには誰にでもそれぞれ使命があること、この世相の中で創価大学が如何に大きな役割を果し得る可能性を秘めているか等々を語る先生はとても魅力的であった。四方山話の後、先生をお宅にお送りしたのは、真夜中であった。先生の奥様は私と弟にお茶を振舞いながら、「二人共、そんな青白い顔をしては、何のお役にも立てませんよ」と厳しくもやさしく激励して下さった。奥様のこの激励は終生私にとって忘れられないものとなっている。その後、すべてに逃げ腰であった私は高松学長より懇ろな御指導をいただき、光栄ある丹木の森に移り住むことができた次第である。

川村先生が創価大学のキャンパスに移ってこられたのは、前任校の都合で2、3年後であったと思う。当時、私は砂田先生の研究室に同室させていただいていたのであるが、川村先生が専任として赴任してこられて間もなく研究室の配分等で、私の入る適当な研究室がなくなってしまっ

た。研究室の使用上の約束の一つに、教授1，助教授・講師2分の1という条項があったからである。困った私は、最速、川村先生の研究室に同居させて下さるようお願いに上った。当然、先生はお一人で一室を使用する立場にあられたわけであるが、私の身勝手な願いを心良く引き受けて下さった。それ以来、十有余年、川村先生の研究室に同居させていただき、公私にわたって御迷惑をおかけし、多くの御指導をいただくことができ、誠に私は幸せ者であったと感謝している。私は時々先生の許しを得て、先生の演習に参加させていただき、学生達と共に先生の御意見を拝聴したり、私の劣い考えを聞いていただいたり、更に、ゼミ生達とも大いに議論をすることができ、とても有意義な研究室での生活をエンジョイさせていただくことができたし、今後もそのようでありたいと願っている。

先生は常に、現在の日本が、世界が抱えている経済問題を提起され、「如何にすれば解決可能なりや」を学生達に問いかけておられた。勿論、病氣療養中の今も館山の地で問いかけ続けられていることは間違いないと思う。先生は、常々、「グローバルに観察し、考えなければならない」、「相互依存で行かなければならない」ことを強調され、学生達のまなこを世界に向けさせようと努力なさっていた。学生達に対しては、おじいちゃんが孫に噛んで含めるように、不況が、恐慌が、いずこより来り、いずこに去らんとするか、石油不況は過去の不況と同一なのか、即ち、再び好況への発条たりうるのか、それとも、世界人口の爆発、エネルギー・食糧・資源の枯渇、自然の破壊等による世界的経済危機を克服する人類の智慧はありや無しや、更に、総体革命とも言うべき、政治・経済・宗教・社会全般にわたる地球（宇宙）大改造計画等々について語りかけられ、学生達を経済問題の渦の中に引き入れ、裸になって角力をとっておられるといった感じの演習であった。その渦中であって、私もいろいろと勝手な意見を自由に主張させていただき、この面からも研究室での生活は楽しいものであった。昨夏、先生は少々張り切り過ぎて、同室させていただいていた私の無能にも責任の一端があるのではとの自責の念にかられることもあるのであるが（本当は私の無能等は芥子粒のようなもので、先生がこれまで追求してこられた世界的経済危機からの脱出口発見の作業にエネルギーの多くを消耗しすぎてしまったのではと推測している）、大切なお身をこわされてしまわれ、現在は自宅療養の立場にあられるわけであるが、一日も早く研究室に復帰されて、先生を先頭に、人類幸福への脱出口探検旅を続けたいものと、演習の時間がめぐり来る度ごとにゼミ生達と語り合っている。

最後に、このようなゼミ生達の代表に、川村先生像を語ってもらったので、それらをお伝えして、先生の紹介の一部を終わらせていただきたいと思います。

前述したように、先生はゼミ生から絶大な信頼を集められており、常に15名程のゼミ生が先生を取り巻いているという図が、日常の研究室での状況であった。その中の一人、野球部に席をおき、全く勉学は苦手であるといつもぼやいている平野隆君は「川村先生には講義をしていただいたと言うよりは、野球の話等が多く、親のような存在であった」と語っており、先生の親をも凌駕する学生指導の一面を伝えてくれている。公認会計士試験に挑戦している三人組は、「川村先生の講義は学生のレベルをよく理解して下さり、平易な用語を使われ、また難解な用語も非常に

わかり易く解説をして下さる等、受講する私達に、噛んで含めるような興味をそそるものであった」(中野昌宣君談)とか、「川村先生は私達のような学生を常に尊敬して下さり、学生を信じてくれるやさしい先生であり、本当に尊敬のできる先生です。そして講義に於ても、学生思いで、自らの豊富な体験等を通して、とても解り易い講義をしてくださいました」(加藤哲也君談)、また「川村先生は、個々の学生の本領をそれぞれに伸ばすように、自由で、しかも向学心を高めるための学びの場として最高のゼミであると思う。また、川村ゼミは、国家試験合格者を多数輩出しており、中でも、公認会計士の合格者は創大四期生以降続いている。この実績は川村先生御自身の合格体験を通しての指導の賜物であると感じている」(平野満君談)とそれぞれ川村先生を心から慕っている。三人共、本年こそは揃って会計士試験にパスして、先生の病魔を吹き飛ばすのだと張り切って勉学に励んでいる。地方公務員になることを希望している緑川修君は「私が、この川村先生のゼミを希望したそもその理由というのは、先生の人柄にひきつけられたからです。先生は経済学を初心者にも解り易く、かつ楽しく教えて下さったので自然と興味がわいてきて、勉強に対する意欲も大きくなった」と感想を述べているし、また、花城正勝君は「私は川村先生の講義を聞きたいと言うよりも、先生の人間性、学生に対する慈愛と言うものに心惹かれ、このゼミを選んだ次第です。私自身は、川村先生とお会いする機会は少なかったのですが、経済学を本当に心の底から学ばせて頂いたと思っています」と語ってくれた。

これらゼミ生達が語る川村先生像は私が先生の研究室に同室させていただいた十有余年を通して、一度も変わることはなかったと思う。社会に巣立って行った多くの川村ゼミ生のすべてが、上に紹介したものと全く同じような感想を抱いていることは間違いのないことと確信している。

それにつけても、一日も早く、病魔に打ち勝って、元気なお姿を研究室にみせてもらいたいのと、一同心より祈っております。

昭和60年5月12日

川村鈴次教授 略歴・業績

明治38年9月22日 東京都杉並区高円寺に生まれる。

昭和6年3月 東京商科大学を卒業する。

昭和6年11月 高等試験司法科に合格する。

昭和8年10月 同 行政科に合格する。

略 歴

昭和7年10月 東京市電気局勤務，企画局企画課を経て同14年8月依頼退職
 昭和14年8月 理研製機株式会社入社，会計課長奉職，同15年10月退職
 昭和16年1月 東北亜鉛鋳業株式会社入社，総務課長奉職，同年4月退職
 昭和16年4月 拓務省勤務，拓務事務官，拓北局勤務
 昭和17年11月 大東亜省勤務，大東亜事務官，満州局勤務
 昭和19年8月 内閣勤務，陸軍司政官，ジャワ軍政監部勤務
 昭和21年7月 復員，外務省大臣官房勤務
 昭和22年2月 福井県勤務，内務部渉外課長奉職
 昭和23年8月 総理庁勤務，経済安定本部名古屋地方経済安定局第三課長奉職
 昭和28年1月 経済審議庁勤務，調査部調査官奉職
 昭和28年11月 同庁戦後経済史編さん室長奉職
 昭和33年7月 経済企画庁長官官房会計課長奉職
 昭和36年10月 経済企画庁長官官房秘書課長兼務
 昭和37年10月 経済企画庁審議官奉職
 昭和38年2月 経済審議会専門委員，東北開発審議会専門委員
 昭和40年3月 依頼，経済企画庁審議官を免ぜらる。
 昭和40年5月 中部日本観光株式会社入社，代表取締役就任，同41年10月退職
 昭和42年4月 名古屋商科大学教授に就任（経済原論，日本経済論，外書講読，ゼミナールを担当）同48年3月辞任
 昭和46年1月 大学設置審議会教員組織審査判定資格（創価大学，講師，日本経済論）
 昭和48年4月 創価大学経済学部教授

著 作 一 覧

1. 『戦後の日本経済』（昭和35年，春秋社）
2. 『中部産業戦後10年史』（共著）（昭和34年，社団法人，中部産業連盟）
 第1部
 I 日本経済の現況分析
 II 戦後日本経済の成長率
 III 日本経済の成長的趨勢をめぐる循環的波動の局面
 IV 成長と循環の主要決定因
3. 「戦後経済史（総観編）」（昭和32年，経済企画庁戦後経済史編纂室）
4. 「戦後経済史（世界経済編）」（昭和33年，経済企画庁戦後経済史編纂室）
5. 「戦後経済史（財政金融編）」（昭和34年，経済企画庁戦後経済史編纂室）
6. 「戦後経済史（経済政策編）」（昭和35年，経済企画庁戦後経済史編纂室）
7. 「戦後の世界経済の歩み」（昭和33年，経済企画庁戦後経済史編纂室）

8. 「財政金融の実態と正常化」(昭和34年, 経済企画庁戦後経済史編纂室)
9. 「戦後の日本経済の歩み」(10回連載)(昭和35年~36年, 総理府編集, 旬報『政府の窓』)
10. 「経済の地球的計画化と日本経済の進路」(昭和46年, 創価大学開学記念論文集刊行会)
11. 「世界的経済危機についての一考察」(昭和51年, 『創価経済論集』第5巻第3・4号)
12. 「世界経済を攪乱するか, 多国籍企業」(昭和54年, 創価大学平和問題研究所『創大平和研究』創刊号)
13. 「景気循環からみた世界的経済危機」(昭和56年, 『創価経済論集』第11巻第3号)
14. 「世界的経済危機をめぐる諸問題」(昭和57年, 『創価経済論集』第12巻第3号)
15. 「世界的経済危機のむすびに代えて」(昭和59年, 『創価経済論集』第13巻第4号)